

アゼルバイジャンのスムガイト化学工業団地

はじめに

去る9月30日、東京の如水会館において大会主催の「アゼルバイジャン・スムガイト化学インダストリアルパーク投資プレゼンテーション」が開催された。そこで本速報ではその様子をご紹介します。

プレゼンテーションではこの度訪日した専門家2人がスムガイト化学インダストリアルパーク(以後、SCIP)の概要やそこでの投資プロジェクトについて発表を行い、日本企業関係者など潜在的な投資家に対してその魅力をアピールした。また、その後の名詞交換も盛んに行われ、会場は活気に溢れていた。

SCIPの概要

SCIP 投資家関係・ビジネス支援部 副部長
S.ママトフ

アゼルバイジャンはコーカサス地方南部の国であり、面積は約8万6,000km²、人口は約900万人、首都はバクーである。アゼルバイジャンが独立国として最初に歴史上に現れたのが100年ほど前の1918年5月28日で、当時はアゼルバイジャン民主共和国と名乗っていた。しかしその後は何十年にもわたってソビエト連邦の一部となっている。そして、1991年10月18日に独立を宣言し、現在に至るまでの20年以上にわたって独立国として発展を続けている。90年代始めから日本との外交関係を樹立しており、1999年からは日本との間に経済委員会ができています。最近の成果としては、2014年2月26日に「第8回日本アゼルバイジャン経済合同会議」が東京で開催され、化学をはじめとする様々な分野において日本との関係を発展させることが決められた。

SCIPは、2011年12月21日にイルハム・アリエフ大統領が出した大統領令によって設立が決定した。このインダストリアルパークは名前のとおりスムガイトという、国内でも規模の大きい都市にある。スムガイトは面積が83km²、人口は約36万人となっている。また、スムガイトは化学分野に特化した都市であり、ソ連時代から多くの石油化学製品が同市で生産されてきた歴史を持つ。そして現在でもそれら設備や企業は存在しているものの、インフラや技術の老朽化が著しい。そのためアゼルバイジャンでは石油・ガス資源の輸出に依存している今の経済構造からの脱却を目的として、スムガイトに化学インダストリアルパークを設立し、同市の化学産業を復興させることが決定した。

SCIPは、首都バクーの北30kmほどの所に位置し、総面積は295.5haで、今後、800haまで拡大することが計画されている。SCIPはロジスティクス面で優れており、空港まで約50km、さらには港やロシアのロストフとバクーを結ぶ幹線道路もすぐ近くにある。また、インフラの開発・整備が進められており、道路や港の整備に加え、バクー〜グルジアのトビリシ〜トルコのカルスを結ぶ鉄道が現在建設中で、2015年までに運行する予定である。これらインフラの発達にはロシア、グルジア、アルメニア、イランと国境を接し、カスピ海を介してカザフスタン、トルクメニスタンなどと繋がっているアゼルバイジャンにとって重要な要素となる。

SCIPには工業ゾーンとパブリックゾーンの2つが建設される予定となっている。工業ゾーンでは、生産活動に必要なインフラがすべて整えられる。水に関しては、工業用水、水道水が区画全体にいきわたり、さらに2つの変電所が設置される。また、鉄道も敷地内に引いてくるため、直接鉄道インフラにアクセス

することができるようになる。一方、パブリックゾーンはインダストリアルパーク内で働く人々が住むための空間となる。そこではホテルに加え、家族とともに住むことのできる建物、幼稚園、スポーツ施設が建設される。そのほかにもオフィス棟や職業訓練校なども建設される。この職業訓練校では1年あたり500人の専門家を養成することを予定している。また、訓練校で養成する専門分野は化学分野に加え、メカトロニクス、建設分野なども含まれる。職業訓練校では、実技にも力をいれるため、卒業生の専門性をより高くすることが可能である。現在、ドイツの職業訓練校とカリキュラムについて話し合いが行われており、2016年頃より実際に生徒の受入が始まる予定である。

今後、国営化学公社アゼルヒーミヤによって石油・ガス精製プラントが完成するため、SCIPへの原材料供給能力が飛躍的に上昇する。また、SCIPでは入居企業への特典として法人税、資産税、土地税、そして設備、機器の輸入にかかる費用が7年間は非課税、入居企業が活動しやすいように担当窓口の一本化、プロジェクトの実行に必要な様々なサービスの提供、行政障壁の軽減などを併せて提供する予定である。

現在、アゼルテクノラインという様々な種類のパイプを製造する企業とアソカールポリマーというポリエチレン、ポリマーを製造する2社がSCIPに入居をしている。そのほかにも入居を希望している企業は多く、それら企業の製造分野は尿素、メラニン、ホルムアルデヒドなど様々である。さらにはイスラエル、フランス、ドイツ、イランといった国々の企業からも入居の希望がある。是非、日本企業にもSCIPの入居企業になっていただきたいと思っている。

SCIPの投資プロジェクトについて

SCIP 上級専門家
A.アラフベルディエフ

SCIPは民間企業ではあるが、経済産業省の傘下にあるため予算は100%国から出資されている。そして現在の予算規模は5億ユーロである。今のところ、予算はすべてSCIPのインフラ整備に利用されており、2016年はじめ頃までには整備が終わる予定となっている。

SCIPではビニール製品に大きな関心を持っている。しかし、アゼルバイジャンの国営石油・ガス会社SOCARがすでにポリエチレン、ポリプロピレンなどの製造を行っているため、それとは競合しないポリ塩化ビニル(PVC)の製造を行う企業の誘致を進めている。一方でポリエチレン、ポリプロピレンについてもSOCARが所有しているよりも高い生産技術の導入も同じく重要な課題となっている。

現在計画しているSCIPにおけるPVCの年間生産量は20万t程度を想定している。しかし国内における需要は8万～10万tとなっており、余剰分はロシア、トルコ、グルジアといった国外市場へ供給される予定である。とくにトルコ市場におけるPVCの需要は年間100万tともいわれている。

アゼルバイジャンでPVCを製造するメリットのひとつは原材料が国内及びカスピ海沿岸に豊富に存在していることである。カスピ海には石油と天然ガスが豊富に埋蔵されており、採掘が盛んに行われている地域である。それはアゼルバイジャンの領海も同様で、同領海には石油が50億t、天然ガスが5兆m³埋蔵していると試算されている。2013年のSOCARによる石油・ガスの採掘量はそれぞれ300万tと60億m³であった。また、アゼルバイジャン全体における石油生産量は2010年の5,080万tをピークに4,500万～4,600万tの水準で推移している。化学製品の原料になる石油・ガスの製油・精製所は国内にあり、一次産品としてエチレン、プロピレン、ベンゼンなどを生産している。しかしこれら原材料、一次産品を利

用してより高度に加工された化学製品を製造して行くことが今後は重要になってくる。さらにアゼルバイジャンには鉱石資源が豊富であり、塩化ナトリウム、天然ゼオライト、炭酸カルシウム、鉄、銅、モリブデン、臭素、ヨウ素、金、銀、プラチナなども採掘されている。

アゼルバイジャンでは化学工業分野の近代化が目指されており、そのための3つの重要な分野が定められている。一つ目は石油・ガスの生産、二つ目は石油・ガス製品の製造、三つ目はメタノールの精製である。ガスから化学製品を製造する際は一度メタノールに精製することによってその後より付加価値の高いエチレン、プロピレンなどが精製できるようになる。アゼルバイジャンではメタノールの精製を目指しているが、そのために不可欠な技術であるMTO (Methanol to Olefin)を導入しなければならない。そこでPSICはMTOの技術を持っている日本企業との協力に高い関心を持っている。同様に国内では臭素やヨウ素も生産し国外へ輸出を行っているが、現時点では原料に近い付加価値の低い状態でしか輸出できていない。そのためヨウ素などをベースにより加工度の高い製品を製造するプロジェクトが必要である。また、アゼルバイジャンでは年間約10億ユーロを国外からの医薬品輸入に費やしているため、医薬品を国内で製造できるようにすることも国内において非常に重要度の高い課題となっている。加えてタイヤ用ゴムの製造も非常に重要となっており、近年、様々な省庁が世界大手メーカーのアゼルバイジャンへの誘致を行っており、今後は世界の先端技術を用いたタイヤの製造をアゼルバイジャンで実現したいと考えている。

SPICに投資をする際の利点は、第一に電力・ガス料金の安さが挙げられる。とくにガス価格は政府とSOCARが決めることではあるが、EU諸国などと比較しても安く抑えることが可能である。また、国内にはすでにかなり発展したインフラが整備されているが、今後も開発・整備は引き続き行われていく。アゼルバイジャン国内では産出しない原料を隣国であるロシア、カザフスタンなどから調達できることも投資を行う上で大きなメリットになる。また、国内製品の輸出先としてロシア、トルコを挙げたが、製品の質、加工度を上げることでEU諸国への輸出の可能性も見えてくる。

SPICにおける具体的なプロジェクトを挙げると、民間企業のAzerbaijan Methanol Companyによるメラミンとホルムアルデヒドのプラントがあり、すでに政府との合意が得られている。ほかには、フランス企業のAir Liquideなどによるガラス製造工場の建設も計画されている。また、SOCARによるカルバミド製造工場、高密度ポリエチレン製造工場、韓国のサムスンと共同でカルバミド、尿素の製造工場を建設する計画もある。

アゼルバイジャンとしては、日本をはじめとする先進国のハイテク技術を導入することで国際競争力を有する製品を生産することが発展のためには必要である。



S.ママドフ氏(左)とA.アラフベルディエフ氏(右)